

Honen's thought on evil

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-05-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 齋藤, 真希
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://doi.org/10.14945/00009409

法然における悪の問題について

齋 藤 真 希

1、浄土思想の基本

法然の思想は仏教思想のうち、浄土思想に属しているものである。それなので、最初に仏教と浄土思想について簡単に説明しておきたい。まず仏教の基本的な考え方とは、生存は苦しみであるということである。しかも、苦しみの生存は無限に繰り返されるものとされている。なぜならば、仏教ではあらゆる生き物は輪廻転生を繰り返すと考えられているからである。仏教の目的とは、このような輪廻から抜け出し、無限に続く苦しみの状態から自由になるということである。

仏教ではその目的のために、自らの力で修行を行うべきであると考えられている。修行とは輪廻から抜け出すために必要不可欠な手段である。こうした修行によって輪廻から抜け出し、苦しみを克服した者を仏と呼ぶ。仏教とは要するに、仏になることを目的とする教えであるといえる。

時代が経つにつれて、仏は超人的な存在として理想化されるようになる。具体的には、仏は自ら苦しみを克服すると共に、他者をも苦しみから救い出す偉大な存在とみなされ、人々の崇拜を集めるようになっていく。特に大乘仏教

の段階になると、多種多様な超人的な仏の存在を認め、そのような仏の救済力によって苦しみから助け出してもらおうという思想が盛んに行われるようになった。

浄土思想とは、そのような思想の典型であると言われている。浄土思想とは、阿弥陀仏の実現した理想的な国土に、死後生まれ変わることを目指す思想である。国土とは、一世界（高い山の周囲を月と日がめぐり、海と四つの大陸がとりまいている） $\times 1000 \times 1000 \times 1000$ を単位とする広大な領域を指している。大乗仏教の世界観によれば、全宇宙のうちには我々が住んでいる国土の他にも、無数の国土が存在している。

いくつかの浄土經典によれば、そのような国土のうちの一つに、法蔵菩薩という優れた修行者がいた。法蔵菩薩は自らが仏になるという志とともに、迷い苦しむ他者をも救おうという願いを持っていた。そこで法蔵菩薩は他者を救う手立てとして、成仏するために理想的な環境を持った国土を作り、その国土へ生きとし生けるものすべてを生まれさせるということを考えた。

法蔵菩薩はこのような願いを四十八の誓いとして具体化し、師匠である世自在王仏の前で宣言した。その後、法蔵菩薩は長年の修行によって四十八願を成就し、自らは阿弥陀仏という名の仏になると共に、自らの住まう国土を淨め、いくつもの理想的な特徴を持つ極楽浄土を作り上げたという。

浄土思想は以上のような浄土經典の説に基づき、阿弥陀仏の極楽浄土へ死んでから生まれ変わることを目的としている。なぜならば、極楽浄土に生まれた者は、理想的な環境のもとで修行を積み、速やかに仏になることができるからである。浄土思想とは、阿弥陀仏の誓いを信じ、阿弥陀仏の救済の力に頼ることで、成仏を目指す思想と言えるだろう。

極楽往生のための方法は、浄土思想史のうちに多種多様なものが考えだされている。一例を挙げると、法然に重大

な影響を与えた中国の善導は、五種の正行をもって往生の行としている。五種正行とは、読誦正行（浄土經典を讀誦する）、觀察正行（阿弥陀仏と極樂浄土のありさまに思念を集中し觀察する）、礼拝正行（阿弥陀仏に礼拝する）、称名正行（阿弥陀仏の名号を称える）、讚歎供養正行（阿弥陀仏を讚歎し供養する）である。

2、法然の浄土思想の特徴

以上、仏教思想のうちの浄土思想の概要について簡単に説明した。法然の思想は、このような浄土思想に連なるものであり、日本仏教思想史において重要な意義を持つものとして位置づけられている。それでは法然の浄土思想とは、一体どのようなものなのだろうか。法然の名著とされる『選択本願念仏集』によつて、このことを見ていこう。

『選択本願念仏集』において、法然はまず仏教全体を聖道門と浄土門に分類している。聖道門は自力で修行して成仏を目指す方法である。これに対して、浄土門は阿弥陀仏の力によつて極樂浄土に往生し、極樂浄土で仏になることを目指す方法である。つまり法然は仏教を自力で修行する方法と、超人的な仏の力に頼る方法の二つに分類している。前者は初期の仏教以来存在する方法であるのに対し、後者は時代の経過と共に超人的な仏への信仰が生じてから発生した方法であるといえる。

このような分類を行つたうえで、法然が勧めることは、現在の人間が成仏を目指すのなら、聖道門ではなく浄土門を選択すべきだということである。要するに法然は浄土門こそが現在の仏教の主流であると位置づけ、聖道門を傍流に過ぎないものと位置づけている。

それでは浄土門を選択した人間は、具体的にどのような実践をおこなえばよいのだろうか。既に述べたように、極樂浄土へ往生するための方法は何種類も存在している。これらの方法を列挙した上で法然が主張するのは、称名念仏

こそが往生のための最も正しい方法だということである。法然の考えにしたがうならば、極楽浄土へ生まれ変わるためには、ただ称名念仏のみを実践すればよいことになる。称名念仏以外の方法は、往生のためには一切必要ではない。

まとめると、法然は浄土門を仏教の主流と位置づけた上で、さらに称名念仏を浄土門において実践すべき唯一の方法としている。つまり法然は、膨大な内容を持つ仏教を称名念仏の実践という一事に集約してしまったと言える。

3、法然思想の革新性

そして一般的に、この称名念仏一行の選択という点に、法然の思想の革新性が見出されている。

その革新性とは、救いの平等性ということである。

仏教における修行の多くは困難なもので、誰にでも実践できるというものではない。修行をするための優れた素質を持つている、修行に費やす時間がある、豊富な財力を持つているなど、何らかの点で優越した人間でなければ、困難な修行をやり遂げることはできない。これに対して、称名念仏は非常に簡単な行である。称名念仏は南無阿弥陀仏と口で称えるだけのことで、どのような人間であっても容易に実践することができる。

法然以前のいわゆる旧仏教と呼ばれる段階においては、困難な修行を成し遂げることこそが、仏になるための常道であると考えられていた。そして称名念仏など簡単な行は、困難な行よりも劣ったもので、効果の薄いものとみなされていた。したがって成仏することのできる者は、困難な修行をおこなうことができるごく一部の特権階級の人間に限られていたのである。称名念仏しかできないような一般民衆にとって、成仏への道は閉ざされていた。

しかし法然が登場すると、成仏の可能性は万人に開かれたものとなる。というのも、法然は称名念仏を重視し、唯

一絶対の成仏の方法として位置づけた。それに対して従来重視されてきた困難な行は、成仏のためには全く不要で、無意味なものに過ぎないとの評価を与えた。

つまり法然は、困難な修行と簡単な称名念仏の価値を逆転させてしまい、成仏に至るための道を誰にでもできる平易なものにしたと言える。その結果、救いの可能性は一部の人間に限定されたものではなく、一般民衆に至るまで誰にでも平等に与えられたものとなったのである。

以上のように従来の研究では、平易な称名念仏一行を選択することによって、救いの平等性を実現したということが、法然思想の持つ意義であり、また法然が先駆けとなった鎌倉新仏教の重要な特性であると評価されている¹。

4、法然思想における不徹底性

しかし法然には、そのような思想的な意義に水を差すような側面が存在していると考えられている。法然が膨大な数の称名念仏を称えたということ、三昧発得の人であったということ、さらに法然が戒律を非常に重視したということなどがそれである。しかしこの発表では問題を限定して、特に戒律を重視する法然の態度について論じていきたい。法然は自ら戒律を厳格に守るとともに、人々に対して戒律を守るべきことを説いている。戒律とは仏教者が守るべき規則であるので、仏教本来の立場からすれば、戒律を重視することは当たり前のことと言えるだろう。

しかし法然は、成仏に至るための道を称名念仏の実践に限定している。そのような法然にとって、戒律を守ることが念仏以外の行である。したがって戒律は原則として、成仏のためには何の意味も持たない行為であるはずだ。法然の立場からすれば、戒律を守るか否かということは、極楽往生という結果に対して何の影響も与えることはない。

それにもかかわらず、法然は戒律を守ることを重視する。これは一体どうしたことなのだろうか。戒律を重視する

法然の態度は、極楽往生のために称名念仏のみを必要とするという、法然思想の原則に反するもののように見える。

さらに、もしも法然が称名念仏の他に戒律を必要としているのであれば、往生の方法は誰にでも実践できる簡単なものとは言えなくなってしまう。いかに称名念仏が簡単であっても、それに加えて困難な戒律が重視されているのであれば、極楽往生は結局一部の人間にしか実現できないものになってしまう。

このことは困難な行を重視し、一部の人間にのみ救いの可能性を認めるという、旧仏教的なあり方への逆行ではないだろうか。一般民衆にまで平等に救いの可能性を開くという、法然思想の革新性は戒律重視の態度によって損なわれてしまいかねない。

以上のような理由から、戒律を重視する法然の態度をいかに理解するかは、法然研究における一つの大きな問題となってきた。従来の研究でしばしば行われているのは、法然の戒律重視の態度を、法然の二面性、あるいは不徹底性として解釈するということだ。²

例えばある見解によれば、法然は革新的な思想をとえながら、指導者としての立場に縛られていたがために、自己の思想を徹底することができなかったという。すなわち、法然は人々に称名念仏による往生の道を説き広め、人々を導く師としての立場にたっていた。そのために法然は、模範的な姿を人々に見せる必要があり、伝統的な価値観で重んじられてきた戒律を野放図に破るようなことができなかった。その結果、法然の称名念仏一行による往生の思想と、戒律を重視するという実践的態度の間に食い違いが生じ、法然の思想は徹底したものにならなかったというのである。³

こうした見解に見られるように、法然はしばしば伝統的な仏教とは一線を隔する革新性を持つ一方で、伝統的な仏教の価値観に泥むような側面を持っていると考えられている。つまり法然とは二面性を持った人物であり、思想的に

不徹底な面を持つとされているのである。

しかしこのような法然観は、果たして妥当なものであるのだろうか。私はこのことについて疑問を感じている。というのも、法然思想が二面性を持ったものとみなされるのは、法然研究の枠組みによるところが大きいのではないかと考えられるからだ。

法然の思想はしばしば、伝統的な旧仏教と革新的な新仏教の対立という図式や、あるいは弟子の親鸞への流れの上に位置づけられて解釈され評価を受けている。このような研究の方法は、仏教思想史上における法然思想の意義を考えるために、非常に有効なものと言えるだろう。

しかしこうした研究の方法は、法然思想の外部に存在する尺度でもって、法然思想を理解するものである。そのために、法然思想自体についての理解が、疎かになりかねないという欠点を持っている。法然の思想に矛盾点が見出されるのも、実はこうした研究方法の特性によるところが大きいのではないだろうか。

というのも、法然の思想自体を検討するならば、従来矛盾点として指摘されてきた法然の態度は、実は法然思想のうちに整合性を持つて位置づけることができるからだ。法然の戒律重視の態度も、法然の称名念仏の思想と決して矛盾するものではない。むしろ法然における称名念仏の特性から、必然的に導き出されるものと考えることができる。以下、このような私の見解について述べたい。

5、法然思想における悪

戒律とは悪と密接な関係にあるものである。悪あるいは罪とは法然思想において、おおよそ二通りの意味に分類できるとい⁴う。一つは戒律を破るといった具体的な行為である。その代表的なものとして、十悪（殺生・偷盗・邪淫・

妄語・綺語（無益なお喋り）・惡口・兩舌（中傷）・貪欲・瞋恚・邪見や四重罪（殺・盜・淫・妄）や五逆（母を殺すこと、父を殺すこと、聖者を殺すこと、仏を傷つけること、教団を破壊すること）がある。もう一つは煩惱や念仏に対する不信など、望ましくない心の状態である。この二つの事柄は煩惱や不信など望ましくない心の状態から、戒律を破るという具体的な行為が行われるという関係にある。

これらの惡あるいは罪とは、生き物を生死輪廻の境遇に繋ぎ止め、苦しみをもたらす要因となるものである。したがって戒律を重視するということは、自ら輪廻の要因である惡を避け、他者に対しても惡を戒めることに他ならない。ここから法然の戒律重視の態度とは、惡を忌み避ける態度であると考えることができる。

ところで惡とは法然思想において、非常に重要な意味を持つ事柄である。というのも、「世すでに末法になり、人みな惡人なり」（『念仏往生要義抄』『法然全集三』二一〇頁）というように、法然は自らを含めた人間すべてを、末法の惡人であると規定している。末法とは釈尊の死から長い年月が経った悪い時代である。このような末法に生きる人間も、また素質の劣った悪い者ばかりであると考えられている。そしてこのように人間を惡人とみなすことこそが、法然思想を成立せしめる前提であると言える。

仏教においては基本的に、人間は成仏を遂げるために、自力の修行によって惡を断ち切っていかなければならないと考えられている。なぜならば、惡とは輪廻の要因であるので、輪廻を抜け出すためには克服せねばならない対象であるからだ。しかし法然はこのような基本的な成仏の方法を、聖道門と分類し、現在の人間には実践不可能なものとして否定する。なぜならば、

「煩惱具足してわろき身をもて、煩惱を断じ、さとりをあらはして成仏すと心えて、昼夜にはげめども、无始より貪瞋具足の身なるがゆえに、ながく煩惱を断ずる事かたきなり。かく断じがたき无明煩惱を三毒具足の心にて断ぜんと

する事、たとへば須弥を針にてください、大海を芥子のひさくにてくみつくさんがごとし」(『念仏往生要義抄』『法然全集』二二三頁)

と述べられているように、現在の自分たちは末法の悪人であって、無限の過去以来、煩惱を起こし続けてきた存在である。そのように絶えず煩惱を作り続ける身でもって、自己の煩惱を断ち切ろうとしても、そのことは例えば須弥山を針で碎き、大海を芥子の柄杓で汲みつくすほどに困難なことであるという。

このように法然にとって、現在の人間は絶えず悪を行い続け、そのことを自分ではどうすることもできない存在である。彼らはそのために自ら悪を断ち切つて成仏するという、仏教の基本的な方法を実践することができない。これは仏教的な価値観に基づけば、人間にとって最も正しく幸福であるあり方を、自力では永遠に実現することのできない、絶望的な状況に置かれたものと言える。

そして法然の思想的課題とは、このような悪人である現在の人間が、それでもなお、いかにして成仏を実現するかということであった。

6、他力による悪の超越

この課題の解決法として法然が見出したのが、浄土門、すなわち称名念仏による極楽往生という道である。称名念仏は南無阿弥陀仏と称えるだけの行である。これはごく簡単なものであるので、誰にでも実践することができる。つまり悪人であるところの末法の人間にとつても、容易におこなうことができるものである。

しかも称名念仏は簡単でありながら、最低の悪人ですら確実に往生させる威力を持っている。なぜならば、称名念仏をおこなう者には、他力という阿弥陀仏の救済の力の働きかけがあるからである。このことについて、法然は『無

量寿經』の四十八願を挙げて説明している。

『無量寿經』によれば、阿弥陀仏が法蔵菩薩という修行者であつた時に、四十八の本願をたてた。この本願のうちの一つで、法蔵菩薩は称名念仏する者をみな自分の浄土に生まれさせようということを誓つたという。つまり法蔵菩薩の誓いにおいて、称名念仏は往生のための正式な方法として定められている。

そして法蔵菩薩の誓いは、阿弥陀仏の超人的な救済力、すなわち他力によつて今現に実現されている。したがつて、称名念仏をおこなうならば、阿弥陀仏の他力がその人に働きかけていき、往生を遂げさせてくれるのである。このように称名念仏とは、他力に接触し、他力の救いにあずかるための方法である。そのために、末法の惡人にすら往生を遂げさせる効力を持っているのである。

このような他力がいかにして実現されたのか、その要因として語られるのが、『無量寿經』で説かれる法蔵菩薩の修行の物語である。『無量寿經』によれば、法蔵菩薩は称名往生の誓いを立てた後、その誓いを実現するために修行をおこなつた。その修行は無限に近い時間にわたつて行われ、純粹な善行を計り知れないほど積み重ねるといふものだった。

善とは仏教において究極的には、人を成仏に向かわせるものを意味している。法蔵菩薩は自ら積み重ねた善行によつて成仏し、阿弥陀仏という超人的な仏となつた。さらにそれだけには留まらず、法蔵菩薩は迷ひ苦しむ生き物を往生に向かわせる救いの力を実現した。要するに他力とは、法蔵菩薩の無限の修行によつて実現した、絶対的な善の力であると考えることができる。

法然によれば、このような他力とは人間の善惡を超越したものであるという。

「たとへばおもき石をふねにのせつれば、しづむ事なく万里のうみをわたるがごとし。罪業のおもき事は石のごとく

なれども、本願のふねにのりぬれば生死のうみにしづむ事なく、かならず往生する也」(十二箇条の問答『法然全集』三二二四頁)

という文章にあるように、人間のおこなう悪がどれほど重くとも、本願にしたがつて称名念仏するならば、他力によって必ず往生を遂げることができる。つまり人間の行うどれほど重い悪であれ、他力の前に出れば、まったく意味のない程度の些細なものでしかない。そして善についても、これと同じことが言える。人間のおこない得るいかなる善であれ、他力と比較するならば、無に等しいほどつまらないものでしかないのである。

法然によれば、善であれ悪であれ、他力に影響を及ぼすほどの働きを、人間は行うことができない。したがって、人間がいかに悪をおこなったとしても、その悪が他力を妨げて、往生を遂げられなくなるということはない。その逆に、人間がいかに善をおこなったとしても、その善が他力を助けて、往生を遂げやすくなるということはない。

このように、他力とは人間のおこなう善悪を超越した、絶対的な善の力である。そのため他力と関わる限り、人間のおこなう善悪はその意味を失い、必然的に成仏に向かわされていくことになる。そして他力と関わりあうための具体的な方法とは、既に述べたとおり称名念仏を称えることである。したがって称名念仏といわば、絶対的な善の力の介在を求めることで自己の悪を超越し、成仏に向かっていくための行為であるといえる。

7、日常的な悪に対する姿勢

このような称名念仏の思想を基本とした上で、日常生活のうえで悪に具体的に対処する仕方を述べたのが、法然が戒律を重んじ、悪を戒める一連の言説であると考えることができる。

というのも、いかに阿弥陀仏の絶対的な善の力と関わっているからといって、日常の生活を送る以上は、自らが善

悪をおこなうという局面と無縁でいることはできない。悪を行うべきか否かといった選択に迫られた場合、どうすればよいのかという問題は、念仏者といえども気にかけてはいられないことであつたろう。

法然の日常的な悪への対処の仕方とは、やむを得ない場合は悪をおこなつても仕方がないが、可能な限りは悪は避けるべきである、ということである。ところで、このように法然が悪を戒めるのは、一体いかなる理由があつてのことだろうか。

念仏を行う限り、人間のおこなう悪は本質的に無意味なものとなる。つまりいかに悪をおこなおうとも、その悪が輪廻の原因としての力を発揮することはない。したがつて法然が悪を禁ずるのは、それが輪廻の原因であるからという理由ではあり得ない。

従来の研究においては、社会や他宗派との融和を図つた結果、法然は悪を戒めずにはおれなかつたという見解や、戒律を守ることが、念仏を補助するために行われるものであるという見解が出されている。しかしここではより根本的な理由として、そもそも法然の念仏の背景には、輪廻の要因である悪を厭い、悪から逃れ出ることを願う態度が一貫して存在していたということを指摘しておきたいと思う。

もしも法然が悪を輪廻の要因として問題視し、その克服を目指す態度を持たなかつたならば、念仏をおこなう必要はなかつただろう。というのも、法然は自らの悪を自力で克服することができないがために、阿弥陀仏という超越的な救済者の介入を求め、それによつて自己の悪を克服することを目指したからである。念仏の実践とは法然にとつて、自己を支配する悪を超え、成仏という理想へ向かつていくための行為であつた。

さらに法然によれば、念仏は一生の間絶えず行われ続けねばならないものだった。

「マコト二十念・一念マデモ、仏ノ大悲本願ナホカナラズ印接シタマフ无上ノ功德ナリト信ジテ、一期不退ニ行ズベ

キ也」〔越中国光明房へつかわす御返事〕『法然全集三』六〇頁〕

とあるように、極楽往生を求める者は、十回や一回の念仏ですら往生すると信じて、一生涯怠ることなく念仏し続けなければならない。なぜならば、ある人が念仏を称えていたとしても、ある時点で念仏を止めてしまったならば、その時点で阿弥陀仏の他力はその人から離れ去ってしまうからである。その結果として、その人は自己の惡に引かれて、輪廻の境遇に沈んでいかざるを得ない。

このような法然の考え方は、彼が一念義を批判する態度からよく読み取ることができる。一念義とは当時流行した説で、ひとたび念仏すれば、その後いかに惡を行つたとしても、問題なく往生することができるという考え方である。法然はこのような考え方に對し、

「マタ念ゼズバ、ソノ惡カノ勝因ヲサエテ、ムシロ三途ニオチザラムヤ」〔越中国光明房へつかわす御返事〕『法然全集三』六一頁〕

という意見を述べて批判している。つまり法然によれば、人間は惡をおこない続け、常に惡の影響を受ける存在である。そのため、他力と関わりあう努力を続けなければ、人間は自らのおこなう惡によって、生死を繰り返すことになってしまう。したがって、人間は念仏によって生涯自己の惡を否定し続けねばならない。

以上のことから結論付けると、法然の思想における念仏とは、絶対的な善の力に関わりあうことによって、絶えず能動的に自己の惡を否定し続けていく営みである。そして、このような念仏者のあり方において、惡とは常に厭い克服すべき対象に他ならないと言える。したがって、法然において惡の克服を意図することは、念仏することの大前提であり、念仏者が持つべき基本的な態度だったと考えることができる。そして、この念仏の前提である態度からは、日常生活のうえでも惡を可能な限り避けようとする姿勢が自然に導き出されてくる。このことは次の文によく表れて

いると言える。

「ほとけは悪人をすて給はねども、このみて悪をつくる事、これ仏の弟子にはあらず。一切の仏法に悪を制せずという事なし。悪を制するに、かならずしもこれをとゞめえざるものは、念仏してそのつみを滅せよとすゝめたる也。わが身の花へばとて、仏にとがをかけたてまつらん事は、おほきなるあやまり也。わが身の悪をとゞむるにあたはずば、ほとけ慈悲をすて給はずして、このつみを滅してむかへ給へと申すべし。つみをばたゞつくるべしといふ事は、すべて仏法にいはざるところ也」(十二箇条の問答『法然全集三』二三四頁)

阿弥陀仏の他力はいかなる悪人も往生させるが、好んで悪を行うことは仏教者のなすべきことではない。悪とは仏教において克服すべき対象であり、そのことは念仏者にとつても同じである。念仏者は自力で悪を克服しようとしても、悪を止めることができないので、他力の助けによつてその悪を乗り越えようとするのである。したがって、念仏者といえども悪の克服を願うべきであり、できる限り悪を避けようとするのが正しいあり方である。

このように念仏をおこなうことと、悪をできる限り避けようとすることは、悪の克服を願うという同じ一つの態度から生じた行為である。そのため念仏をすることと、戒律を重んじ悪を戒めることが、法然において矛盾した行為であるということとはできない。むしろ悪を戒める法然の態度は、法然における称名念仏の意義から必然的に生じてくるものであるといえる。

注

¹ 『アジア仏教史日本編Ⅱ 鎌倉仏教Ⅱ』(佼成出版社、一九七二年)

² 田村田澄『法然上人伝の研究』(法蔵館、一九五六年)、福井康順『法然伝についての二三の問題』(『印度学仏教学研究』通号一〇、

日本印度学仏教学会、一九五七年）、家永三郎『家永三郎集』第二卷（岩波書店、一九九七年）、信楽峻麿『親鸞と浄土教』（法蔵館、二〇〇四年）

³ 石田瑞麿『日本仏教における戒律の研究』（在家仏教協会、一九六三年）

⁴ 矢野了章「法然における罪惡の問題」（『真宗学』通号四五・四六、龍谷大学真宗学会、一九七二年）

⁵ 大橋俊雄訳注『法然全集』第三卷（春秋社、一九八九年）、以下『法然全集三』と記述する。

⁶ 坪井俊映「法然教学における戒の問題」（『仏教大学研究紀要』通号三九、仏教大学学会、一九六一年）、齋藤隆信「法然の戒と念仏」（福原隆善編『八百年遠忌記念法然上人研究論文集』、同朋舎、二〇一一年）

（さいとう まき 静岡大学人文社会科学部講師）